尿蛋白定量末吉法について

会田　恵

尿蛋白定量法は、現在まで幾多の変遷があるが、末吉法は既に歴史的なものとなった。

臨床検査法の中で、本法は日本人の名前の付されている数少ない中の一つであり、昭和四九年の調査（日医サーベイランス）では、尿蛋白定量法の中で「エスバッハ管による法又は末吉管による法」では一五・八％に用いられていた。その後急速に減少している。また金井泉著『臨牀検査法提要』では、昭和三六年六月の一九版増刷の中での紹介が、エスバッハ法と共に最後となっている。

尿蛋白定量法の歩みの一つとして、末吉雄治先生（以下「末吉」）の紹介を行い、末吉法（以下「本法」）の発表論文などについて述べる。

主な略年譜

明治一四年九月	奈良県御所市に生れる
明治四二年三月	東京帝國大学医科大学医学科卒業
明治四四年一月	東京帝國大学医科大学助手
大正三年五月	同　副手
大正六年九月	千葉医学専門学校教授（医化学）
大正八年九月	慶應義塾大学医学部助教授（医化学）
大正九年五月	欧米視察（一一月帰国）
大正一〇年四月	東京女子医専教授（兼任）
昭和八年七月	慶應義塾大学医学部教授
昭和二二年六月	東京女子医科大学長
昭和二七年四月	慶應義塾大学名誉教授
昭和二九年五月	東京女子医科大学名誉教授
昭和四九年四月	逝去

尿蛋白定量法についての発表は、大正三年（一九一四）東京醫学会雑誌（二八巻三号）と大正四年（一九一五）東京帝國大学醫科大学紀要（一四巻―独文）に二回のみである。当時東京帝國大学医科大学医化学教室は隈川宗雄教授

と須藤憲三助教授であった。大正六年以降の研究テーマは一貫して脂質代謝に関するものであった。

末吉は前述の論文の中で、「新法ハ精密ノ度ニ於テハ土屋氏法ト伯仲ノ間ニ伍スルニ過ギザルモ尚新法ハ実施法の簡単ナルコト試薬ノ得易キコト等ニヨリ寛用上一層適切ナルヲ信ズ」と本法を薦めている。

ちなみに、土屋氏法は明治四一年（一九〇八）当時ベルリン大学にいた土屋岩保により発表されたもので、エスバッハ法（一八八〇）の改良であった。その後明治四二年より入沢内科で研究に従事。

本法もエスバッハ法も近年まで半定量法として用いられたのであった。またエスバッハ法、土屋氏法がピクリン酸を用いるが、本法はズルホサリチル酸法に入るもので、次の組成である。

昇汞二〇g、臭化カリウム五g、塩酸（三〇%）一〇ccm、蒸留水五五ccm、以上にアルコール（九五%）を加えて一〇〇ccm

なお本法用の試験管は、東京本郷の桝水商店で多年販売して来ている。（委託製作）

（新潟県柏崎市）

京都における近代麻酔科学への道程

藤田俊夫

申すまでもなくわが国医学の近代化は明治に始まるが、外科麻酔についても維新戦争が大きな転機となった。それは慶応四年（一八六八）正月、戊辰戦争が没発するや薩軍、幕軍共に銃弾創に斃れる者が続出したのであるが、薩軍軍医たちは近代外科的処置について教育されていなかったため、みすみす救かるべき兵士が多数死亡した。そこで西郷隆盛の要請に応じて「英公使館付医師ウィリスが入京し、相国寺山内養源院を臨時に軍病院として治療をおこなったのである。彼は過マンガン酸カリで消毒をおこない、クロロホルム麻酔のもと四肢切断術を施行した。これは医師たちの耳目を奪うに足る最近の医学であった。四肢切断術は当時としては第一級の手術であり、切断の適応のある傷者